

文藝春秋 BOOK 倶楽部

BUNGEISHUNJU 2003.3

何清漣

中国社会を内部から観察し、改革・開放の問題点を剔出

中国現代化の落とし穴 噴火口上の中国

評者 中嶋嶺雄
国際社会学者

最近バラ色の未来像がもてはやされ、気味の中国社会の内面を鋭く抉った本書は、一九九七年に香港で出版された際、原題を『中国的陥穽（中国の陥穽）』といい、翌九八年には『現代化的陥穽』と改題して中国で刊行され、ベストセラーとなった現状告発の書である。中国ではまもなく発禁処分となったが、わが国の

読書界では大いに受け入れられている。本書がよく売れているのは、もちろん、本書の自身が大変色濃く中国の抱える社会的・経済的な矛盾を描き出しているからであろうが、本書の刊行に懸けた出版社の熱意にもよるのではないか。最近の中国ブームに乗って際物も多い中国関連書のなかで、このところ草思社は、『や

がて中国の崩壊がはじまる』（ゴードン・チャン）、『やがて中国との闘いがはじまる』（ロス・H・マンロー他）、『ある中国人密航者の犯罪』（銭黄山）といった一連の読み応えのある中国関係の翻訳書を読者に提供してきている。これらの訳書から得られる中国情報は、わが国の多くのマスメディアが描く中国像とは本質的に異なっていて、中国の実像に迫っているものが多い、と私はかねがね思っていた。

ところで本書の強みは、著者が二〇〇一年六月に米国へ事実上の亡命を余儀なくされるまで、中国内部の党機関（中国共産党深圳市委員会宣伝部）や研究機関

（中国社会科学院公共政策センター）に身を置き、中国社会を内部から観察して、いわゆる改革・開放政策や現代化路線のもつ矛盾と病理を実に克明に描いていることであろう。上海の復旦大学で経済学修士となり、郷里の湖南財經学院で教鞭もとっていた著者は、とくに「経済におけるモラルの崩壊」（第六章）、「農村社会の変化と地方マフィア勢力の台頭」（第九章）、「ブラック・エコノミーと黒社会の勃興」（第十章）といった章で、わめて具体的に問題を語っている。中国当局（国家安全局）が彼女を常時監視したり政治的迫害を強いたりしたゆえんであろうが、昨年わが国でも被害が報じられた中国製薬品についても、「粗悪な偽商品のなかでも数量が圧倒的に多く、一般大衆への危害がもっとも大きいのは、

全国の市場にあふれる偽薬品である。山東、遼寧、四川はいずれも全国の偽薬品の集散地である」として具体的なデータを挙げていて、強い説得力をもっている。

一方、一向に政治改革が進まず、民主化はさらに遠のいている共産党独裁体制

下で、最近、地方農村などでは人民代表や村長が選挙で選ばれ始めていることをもって政治体制に変化の兆しを予測するといった報道やレポートなども出始めているけれど、この点を著者は、実情を詳細に記述した後、「以上の事例が物語っているように、中国の村落で実施されている民主選挙なるものは、当局が宣伝しているような『完全に村民の自主性に任され、政府は選挙の表舞台から姿を消した』ものでないばかりか、当局が『平和的で理性的』と宣伝するようなものでは決してなく、政治の干渉と暴力に満ちあふれているのである。しかも、なにより怖ろしいのは、暴力が主として政府と結託した地方マフィア勢力によるものであることだ」と語っている。

中国社会の病理のなかで深刻な問題は、汚職や地下経済ばかりでなく、麻薬や「ピンク産業」にまつわる犯罪だというのが、この点についても著者は、「中国におけるブラック・エコノミー活動の氾濫という現状には、腐敗した政府の役人の暗黙の支持または直接の参加が深くかかわっていることである」と述べている。

こうして著者は、「社会の危機がしだいに深まるにつれ、政府の主要な任務はまたもや歴史の古い道に戻る可能性が高い。それは軍隊と政治の独裁手段をもって、過去一世紀半にわたり中国でくり返して出現した伝統的危機、すなわち最下層の騒乱を防止することである」と結論づけているけれど、まさに昨秋の中国共産党第十六回大会が示した江沢民型政治はこのことを如実に物語っている。

なお私は、本書の発刊に際して来日した著者と同大会を含む中国の現状に関して対談したが、いわゆる「三つの代表」（中国共産党は先進的な生産力、文化および人民の利益を代表するというテーゼ）について著者は私ほど否定的ではなかったのが印象的であった（政治改革はどこへ行つた『Voice』〇三年二月号）。

(419)

(418)



草思社
1900円